



中国西南民族史

7. 南詔国の滅亡



公主降嫁の顛末 ①発端

876, 8月頃 高駘, 成都に羅城を築く

- 南詔国軍の再来(あるいはその噂が立って城を築く賦役労働者が浮き足立つこと)を恐れ, 仏僧景仙を雲南に送る

※公主降嫁は唐側(高駘)が発議した?

- 高駘: 当時の唐側で一番の「南詔国通」
 - 仏僧を送ったのも雲南の仏教流行を知っていたから
 - 公主降嫁の希望があることを察知していた?



公主降嫁の顛末 ②経過

878 4月 南詔国側は酋望趙宗政を派遣して和親
(=公主降嫁)を求める

※唐側では降嫁を否とする崔澹・鄭畋らと
賛成派の高駢・盧攜らの論争となる(~5月)

「恐垂笑後代」

12月 趙宗政の帰国に際し, 崔安潜に返答を
書かせる。安潜は崔澹の説を採用

※ここで和親の議はいったん否定された



公主降嫁の顛末 ③経過

880 陳敬瑄, 西川節度使となり, ふたたび和親の議を取り上げる

- 中央では盧携や豆盧瑑が推進論を展開
- 和親と南詔国の「不称臣」を容認する詔が陳敬瑄に降され, 安化長公主の降嫁が内定

12月 黄巢軍が長安に入城

881 正月 僖宗, 成都に到着

- 黄巢の乱による中原の混乱→西南の混乱は避けねばならない



公主降嫁の顛末 ④経過

- 隆舜, 宰相趙隆眉・楊奇混・段義宗らを行在(成都)に派遣, 公主を迎えに来る。
 - 高駢, 揚州から「三人者, 南詔心腹也, 宜止鳩之, 蛮可凶也」との謀略を主張

881(?), 882にも公主を迎える使節

※唐側は「方議公主車服」「以方議禮儀」等を口実に先送り

→本気で降嫁させる気はあまりない?



公主降嫁の顛末 ⑤経過

883 7月 南詔国は布燮楊奇肱を遣わして公主を迎える

- 唐は始めこれまでと同様の先送りをはかる
「鑿輿巡幸, 儀物未備, 俟還京邑, 然後出降。」
- 楊奇肱はこれに納得せず, 成都へ乗り込む
「奇肱不從, 直前至成都。」

→張鷟を礼会五礼使, 徐雲虔を副使, 嗣虢王約を婚使とする使節を組織
(唐の先送り策が通用しなくなった)



公主降嫁の顛末 ⑥結末

■ 婚使は出発したのか？

■ 「未行, 而黄巢平, 帝東還, 乃歸其使。」(『新唐書』)

■ 「已而黄巢敗, 収復長安, 僖宗東還, 乃止。」
(『新五代史』)

■ 「次驛, 報収復長安, 黄巢東走, 乃託以他歳而止。」
(『五代会要』)

→そもそも成都を出発しなかった or
出発したが途中で引き返した？

■ 結局, 10年がかりの交渉の結果, 降嫁は実現し
なかった



蒙氏の権威の相対化

- 唐との関係が蒙氏の権威の源泉となりえなくなる
(西川における待遇低下・世隆の冊封拒否)



- 軍事遠征
 - 対外的: 唐に対する実力誇示
 - 対内的: 唐からの高い待遇を勝ち取ることで
競合する勢力に対する優位性を確保



蒙氏の権威の相対化

- 豊祐・世隆期は対唐戦争を強行する力量を南詔王が保持(王嵯巔・杜元忠ら主戦派の支持?)
↓
- 隆舜期にはそのような動きは影をひそめる
 - 遠征の失敗?による主戦派の後退
 - 滇池地区の地位上昇
↓
- 別の方法で南詔王の権威維持を画策(戦後の公主降嫁へのこだわりもその一つ?)



新たな権威の源泉を求めて

仏教への傾斜

- 雲南への仏教の伝来: 上限は不明



- 南詔国後期(隆舜時代以後)におおいに流行
(当時成都で流行の密宗: 南伝仏教ではない)

↑ 留学生が持ち帰った?

- 多数の仏寺・仏塔の建設

大理崇聖寺三塔



大理崇聖寺三塔

主塔は南詔国時代のもの
(他の二塔は大理国時代)





南詔建極大鐘



崇聖寺
佛都

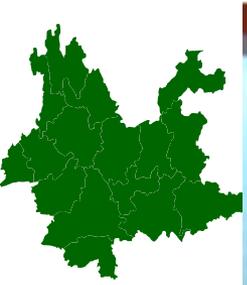
禮佛 禮佛 禮佛
和善人生





三塔から「出土」した鍍金仏塔模型





阿嵯耶觀音金像



(大理国時代)

弘聖寺塔 (大理国時代)







『南詔図伝』

- 画卷と文字巻からなる巻物
(画卷は長さ十九尺一寸五分, 紙幅一尺四分)
- 日本(京都・藤井有鄰館)に所蔵
- 原本の作成は南詔国の中興2年(898),
原作者は南詔王の側近王奉宗・張順ら
- 現存のものは12世紀頃の複製であると言われる



『南詔図伝』

- 李霖燦『南詔大理国新資料的綜合研究』
(中央研究院(台北)民族学研究所專刊之九, 1967)
史料の紹介と写真版, 文字卷全文の録文
- 藤沢義美『西南中国民族史の研究』(大安, 1969)
前編第一章「大理盆地の前史」に詳しい紹介
- 立石謙次「史料研究『南詔図伝』文字卷校注」
(『東海史学』37, 2)



『南詔図伝』

- 蒙氏の建国=張氏からの権力委譲という
遜位伝承の創成(「鉄柱記」の引用)
- 仏教的色彩が濃厚
 - 梵僧から細奴羅・羅盛父子への授記
 - 末尾に「摩訶羅嗟」隆舜が描かれる maharaja?
- 「西洱河記」: 西洱河に対する信仰の取り込み
→ 南詔王室の正統化が第一の目的



「象徴としての南詔王」?

- 蒙氏が唐からの権威づけを失って以降，実権は楊氏・段氏などの白蛮大姓に移る



南詔王は一種の「統合のシンボル」として
機能?



- 隆舜に関する記述：「法は畋獵、酣飲を好み，国事は大臣に委ぬ」



南詔国の衰亡

- 公主の降嫁: 結局実現せず

(「已而黃巢敗, 收復長安, 僖宗東還, 乃止」)

※唐王朝自体が衰退→権威を付与する能力を次第に失う

- 南詔王の権威の源泉が唐との関係(和戦いずれにせよ)にある, という性格は南詔国一代を通じて変わらず



唐が滅びるとき南詔もまた滅びざるをえない



鄭氏による篡奪

902 漢人系の鄭買嗣(鄭回の子孫),
舜化貞を殺し国を奪う

※ただし南詔国時代に形成された「クニ」としての
枠組みは残される



■ 異なる原理の王権が必要とされる?



蒙氏を継ぐもの

大長和国 (902~928)

■ 鄭買嗣は鄭回の七世孫, 舜化貞を弑殺後自立

910 鄭買嗣死す, 子の仁旻継ぐ

914 黎州に侵攻

920頃 前蜀政権に遣使

923~5 南漢に婚姻を求める 実現(増城公主)

926 鄭仁旻死す, 子の隆亶継ぐ

925~7 後唐, 大長和国を招諭



混乱の時代

928「東川節度使」(剣川節度?) 楊干貞,
鄭隆亶を殺し, 趙善政を擁立する

大天興国(928)

- 趙善政「僅か十月」で楊干貞に廃される



混乱の時代

大義寧国 (929~37)

- 楊干貞がみずから即位

937 段思平が楊干貞を倒し、大理国を立てる

※当時の四川は混乱状態(前蜀→後唐→後蜀)
中原側に史料なし



断絶と継続

- 鄭氏 (大長和国)
- 趙氏 (大天興国)
- 楊氏 (大義寧国)
- 段氏 (大理国)

→ いずれも南詔国時代からの支配階層の一員
政権交代といっても、おなじ支配集団内における
政権担当者の交替にすぎない

- 大理国前期まで、南詔国後期の体制や制度が
基本的に継承された(通説)



中原に対する姿勢も

- 婚姻政策の継続／対等性の主張も変わらず
 - 「南蛮選布燮段義宗、判官賛衛姚岑等為使入蜀。義宗不欲朝拜，遂禿削為僧，曰大長和国左衛崇聖寺賜紫沙門銀鉢。」(史料7.7)
 - 「長和驃信鄭旻遣其布燮鄭昭淳求婚于漢，漢主以女增城公主妻之。」(史料7.8)
 - 「公主竟終於其国。」(史料7.9)